Ⅶ　長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡

笹澤　浩

1　はじめに

中野市柳沢遺跡で出土した銅鐸と銅戈は、わが国考古学界に与えた影響は余りにも大きい。すでに概報（上田 2007、綿田 2008、長野県埋文センター 2008、広田 2011）をもとに青銅祭器に直接触れた論考もある（松沢 2008、小山 2011）が、大多数は報告書待ちの状態にある。むしろ青銅祭器を使用したと思われる栗林期に係わる諸問題について（石川 2009・2010・2011、笹澤 2008・2009・2011b、工楽 2008）か、銅鐸の周辺についての論が出されている（難波 2010・2011）。

従来、長野県は西日本の青銅器文化圏に属さない地域でありながら、大町市海ノ口銅戈や千曲市箭塚銅剣などの存在は伝承に基づくだけに評価が分かれる中で、海ノ口銅戈はむしろ積極的に評価されていた（吉田 2001）。柳沢青銅器は青銅器のみならず栗林文化そのものについて従来と異なる視点から、再検討がせまられることになった。つまり栗林文化と西日本弥生文化との関係である。もともと栗林式土器は県境をはるかに越えて広域に分布し、接触地域など大きな課題であったが、さらに近畿地方や北部九州との係わりも視野に入れた検討も必要になった（笹澤 2011a、設楽 2011a・b）。柳沢青銅器は別稿でふれられているとおり、銅鐸は古段階に属し、銅戈 8 本のうち、 1 号は九州型、他は大阪湾（近畿）型でも古式に属するところから、その搬入経路と時期及び搬入方法が大きな課題となった。この課題は我が国における青銅祭器配布システム存在の有無や、配布あるいは流布など、青銅祭器分布の在り方や生産について共通するところである。加えて、埋納は一括であり、方法も西日本と共通している所から、長野盆地と西日本弥生社会が弥生中期後半という時点で結びつきがあったと云えるのである。

栗林文化の研究は、その象徴である栗林式土器や石斧などの石器類について、古く 1930 年代に藤森栄一氏らによって進められた（藤森 1936、神田 1935・1936）。戦後、坪井清足氏らの中野市栗林遺跡の発掘（坪井 1953）を経て、桐原健氏（桐原 1963・1966・1973）や筆者（笹澤 1977）らが係わってきた。

栗林文化研究史の上で大きな画期は、1980 年以降長野県下全域での開発に伴う大規模調査である。長野盆地では長野市篠ノ井、浅川扇状地、柳原・小島の各遺跡群や松原・榎田・平柴平、中野市栗林、飯山市小泉・上野の各遺跡は大規模調査の代表例である。これらは集落、墓域、水田跡を含む集落構造や長野盆地の集落遺跡の分布状態、集落や墳墓などの個々の構成要素（属性）を検討する上で重要である。

弥生土器の編年も膨大な資料の集積によって、筆者の編年（笹澤 1977・1996）を越えた新たな編年が組み立てられ今日に至っている（青木・贄田 2000、寺島 2001、石川 2002、馬場 2008b）。こうした細分化された編年観をもとに馬場伸一郎氏の展開した松原遺跡の巨大集落形成の研究は重要である（馬場 2007・2008a）。馬場氏は同時に榎田遺跡と松原遺跡で町田勝則氏において明らかにされた太型蛤刃石斧などの石器原産地における分業システムとそこから半径 100km に及ぶ流通の実態（町田 2001）をさらに積極的に推し進め、広域交易システムを提案するに至った。石斧を広域交易の主要な物品として代替に佐渡や上越市吹上遺跡の管玉と対等な関係で交互交易したと云うものである（馬場 2011）。

この馬場氏の一連の発言は、松原遺跡の巨大化が集約農業と手工業（石器生産）のために松原遺跡の近隣から集住したという考え方（馬場 2007）を発展させたものであるがいくつかの課題もある。例えば、石斧―管玉交換論についてもこれだけでは無理がある。かつて筆者も上越市吹上遺跡の立地と管玉や勾玉

の県内における分布などの分析を通して最初は吹上産の、ついで佐渡平田産玉類が長野県内の栗林期の社会にもたらされたことを指摘した（笹澤 2004）。その時も玉類と石斧との交換を視野に入れたが、吹上や平田遺跡での榎田―松原産の石斧類は余りにも少なく交換論にあえてふれなかった。松本や佐久盆地などへの交易として太型蛤刃石斧を持ちこんだ時にこれら地域からの代替品は一体何であるか、この点に触れないと互恵的交換論は成立しないことになろう。今後の課題である。

しかし、上越市吹上遺跡の調査成果（笹澤ほか 2006）は長野盆地の栗林社会を考える上で重要である。日本海交流の拠点として、かつ長野盆地に近い吹上遺跡は狭義の栗林文化圏のなかにある（笹澤 2004）。信州を志向した玉作遺跡であるとともに、出土した銅鐸や銅戈を摸した土製品の出土から吹上遺跡では銅鐸・銅戈を周知していたと考えられるからである（笹澤 2004、難波 2010）。いっぽう裾花川以北の長野盆地北部は石川日出志氏の指摘（石川 2011）を持つまでもなく栗林文化成立期の集落遺跡が集中している。柳沢青銅祭器が日本海を北上し吹上遺跡を中継地点としてもたらされた可能性はきわめて高いのである。したがって本稿では柳沢遺跡が存在する長野盆地の栗林期集落の動態について、最近の安藤広道氏の提言（安藤 2011）も視野に入れながら、調査が進んでいる長野市北部の浅川扇状地遺跡群と小島・柳原遺跡群、飯山盆地（狭義）の小泉と上野遺跡を取上げて触れる（註 1）。

浅川扇状地遺跡群と小島・柳原遺跡群は相近接するとともに扇状地と千曲川沿いの自然堤防上に立地し、小泉と上野両遺跡も丘陵と千曲川の自然堤防上の隣り合う遺跡であり、柳沢遺跡に近い。またこれらの遺跡群の中間に長野盆地北部の大規模遺跡である栗林遺跡があるから、栗林期の集落遺跡の動態を比較検討する上でこれらは好資料である。青銅祭器が共同体の所有物である以上、柳沢青銅祭器を使用した集団を、長野盆地北部の栗林期の集落遺跡の動態を中心に少しでも探ることが本稿の目的である。しかし、栗林遺跡の中心部は範囲確認調査のみで、実態が不明であり、今回の検討から除外した。

2　浅川扇状地遺跡群

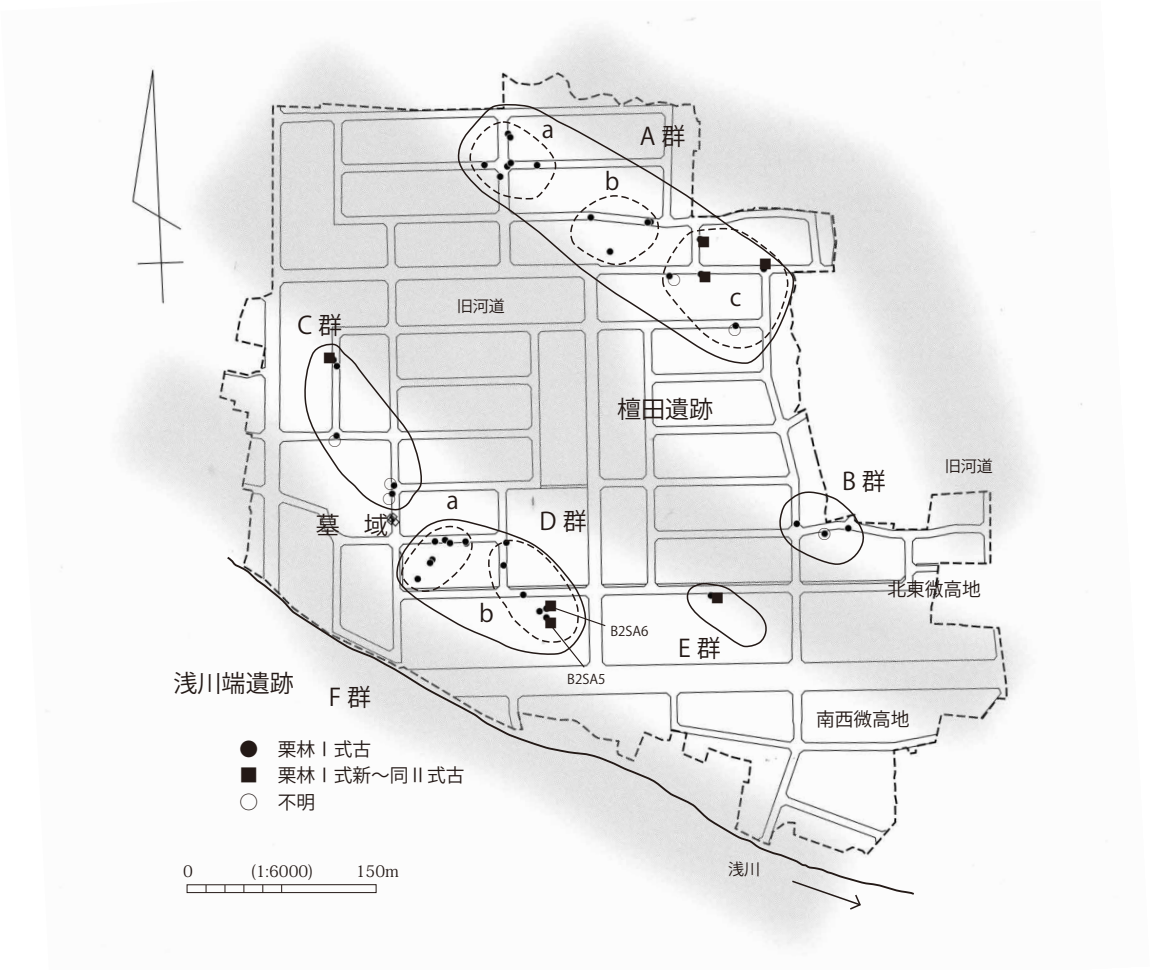
（1）壇田遺跡

浅川扇状地は旧市街地の北部にあり、浅川とほぼ並行して流れる新田川、徳間川、駒澤川などの小河川による複合扇状地である。西は裾花川扇状地と、東は千曲川沿いの小島・柳原の自然堤防に接している。これらの地形には浅川扇状地遺跡群・裾花川扇状地遺跡群（長野遺跡群を含む）と小島・柳原遺跡群があり、縄文時代から中・近世に至る遺跡が数多く密集している。

浅川扇状地は扇頂部と扇端部までの比高差が比較的小さく、ゆるやかな斜面である。ここに浅川をはじめ小河川による浸食や堆積作用によって、尾根状の丘陵が発達している。しかし、丘陵と各流路との比高差は小さく、かつ長年にわたる土地利用と、1960 年以降の大型団地造成事業などの開発事業によって、旧地形が失われ、今日それらの痕跡を見出すことは困難である。

長野市壇田遺跡は浅川扇状地遺跡群のうちでは扇頂部側にある遺跡群のひとつである。大規模開発に伴う発掘調査で、旧地形と集落遺跡との関係が分かる数少ない遺跡である。集落域は現浅川とそれと並行してある 2 本の河道跡とこれらの間にある尾根状台地に沿ってあり、縄文時代中期前葉から中世にいたる複合遺跡である。本稿で対象とする栗林期に限れば、現浅川沿いの南西微高地と、旧河道を挟んだ北東微高地に集落域がある。この両集落跡をそれぞれ南西集落、北西集落と呼ぶと旧河道を挟んだ集落間の距離は 100 メートル前後である。なお旧河道跡は下部調査が未実施のため、正確な旧地形の復元は出来ないが、遺構の分布状況から推定できる（清水・山下 2005）。

栗林期の集落（第１図）は竪穴住居跡と土抗及び集団墓で掘立柱建物は見られない。竪穴住居は 41 棟でうち 31 棟は出土土器及び遺構の切り合いなどから、所属時期は分かるが、6 棟は不明である。残る 4 棟についても報告書に記載がないので、ここでは 31 棟を検討の対象とし、10 棟は全体の中で補足的に使用することにした。また、全面調査でないため、総住居数は若干上まわるであろう。



第１図　長野市檀田遺跡栗林期の集落（1；6000）（清水・山下 2005　改変）

北東集落は 19 棟で北のＡ群と南のＢ群に大別される。Ａ群はさらにａ・ｂ・ｃの３単位集団（単位建物群）（笹澤 2010）とすることができる。ａ・ｂ単位集団は栗林Ⅰ式古段階、ｃ単位集団は栗林Ⅰ式新段階であることからａ・ｂからｃ単位集団に住居が移ったと理解される。ａ単位集団では２棟、ｂ単位集団では１棟に切り合い関係があるから建物の建て替えもあったと思われ、各単位集団の総住居数はもっと増すことも予想されるので、ａ・ｂからｃへの移動は一部であったとすべきであろう。Ｂ群は３棟あり、２棟は栗林Ⅰ式古段階で１棟は時期不明である。

南西集落は墓域を挟んで北側にＣ群、南側にＤとＥ群がある。Ｃ群は 100 メートル近い距離間に住居が散在し、かつ未調査地が多く残されているうえ、時期不詳３棟も含むので、少なくとも２単位集団の存在が予想されるが、ここでは一括しておく。Ｄ群はａとｂ単位集団があり、それぞれ５棟前後の竪穴住居からなる。墓域に近いａ単位集団は２棟に切り合いがあるが、いずれも栗林Ⅰ式古段階であり、Ａａ単位集団と共通する。ｂ単位集団は６棟からなるが、うち４棟が栗林Ⅰ式古段階、２棟が栗林Ⅱ式古段階と思われる。ただし、後者のうち竪穴住居 B2SA5 には床面資料に栗林式土器の属性を取り込んだ小松式

系甕（No769）があり、上越市吹上遺跡例を見る限り、栗林式Ⅰ式古段階よりは後出的である（笹澤ほか2006）。またこれに近接した竪穴住居 B2SA6 は併出資料が少なく時期決定の試料を欠くが、B2SA5 と同時併存の可能性もあり、両者を同時期とした。このようにｂ単位集団についても、課題は残されるが、Ａ群と同様にＤａ単位集団からＤｂ単位集団への移動またはＤｂ単位集団内での移動が考えられる。Ｅ群は栗林Ⅰ式新段階の竪穴住居１棟のみであり、あと数棟の存在が予想される。

Ｃ群とＤ群の境界にある墓域は主軸を南北方向に一定の６基と直交させた３基の計９基からなる。７基が礫床木棺墓で２基が組合わせ式木棺墓Ⅰ類（福永 1987）であり、後者は主軸方向で２大別したグループにいずれも１基ずつある。未調査地を残したり、箱清水期の竪穴住居に切られたりしているので、実数はいま少し増えると思われる。副葬品は木棺墓 SJ5 から太型の管玉５点が、礫床木棺墓 SJ7 から細型管玉３点が出土している。いずれも碧玉製である。太型管玉は長野市伊勢宮遺跡木棺墓や鶴萩七尋岩陰遺跡など栗林期以前の墳墓の副葬品に見られるもので、その伝統の中にある例として注目される。SJ7 も含めて素材が碧玉製である所から、これらの墳墓がいずれも栗林Ⅰ式古段階のうちにあることの証であろう。次に主軸方向からみた場合に、檀田遺跡の墓群が、かつて小泉遺跡の集団墓の分析で示した２基１対墓を基本とした家族墓（笹澤 2010）であることは容易に是認できるところである。１部の墳墓に僅かながらも切り合い関係があり、主軸方向に若干のブレが生じていることは、埋葬に時間差があることを示しているが、基本的には各墳墓の構築は一定の範囲に主軸をそろえるか、直交させるという配慮があり、また、集団墓を構成する一部の墳墓に玉類を副葬することも小泉遺跡と共通する所である。よって、檀田遺跡も２世代から長くても３世代にわたる家族墓として良いと思われる。しかし問題は小泉遺跡に比較して墓数が極端に少ないことにある。これは、松原遺跡例とも共通する課題でもある。栗林期の集団墓が居住域に接して設置されている所から、ＣないしＤ群の墓域ということにとどめておく。しかし、逆に言うならば、Ｃ・Ｄ群の居住時間が、この墓域の存続期間とさして大きく変わらないということであり、Ｃ・Ｄ群の存続期間が居住域の分析と一致することになる。

以上の検討を通して、檀田遺跡の栗林期の集落は、栗林Ⅰ式古段階に始まり、居住域を移しながら新段階で終るが一部はⅡ式古段階まで続いたことを指摘して来た。集落の基本は５集団程度の血縁的結合による単位集団が、地形ごとに複数結びついて、ひとつの集団（南西集落や北東集落）が構成されていたと思われる。これらの集団が都出比呂志氏の云う世帯共同体になろう。さらに、世帯共同体が複数結びついて、地縁的な結合体である農業共同体（都出 1970）を形成していたと思われる。

檀田遺跡の浅川を挟んで南に浅川端遺跡がある。直線距離で 120 メートルほどである。栗林Ⅰ式古段階の竪穴住居が３棟まとまって検出されている。これらも檀田遺跡に見る農業共同体の一部を成していたと見てよいであろう。

以上から檀田遺跡の栗林Ⅰ式古段階の集落は北東集落の５棟からなるａ単位集団、３棟からなるｂ単位集団のＡ群とＢ群２棟のＡ・Ｂ２群 10 棟と、南西集落のＣ群１棟（プラスα）、Ｄ群はａ単位集団５棟、ｂ単位集団４棟の２群９棟プラスαとなろう。これに浅川端遺跡をＦ群とすると３棟１単位集団が加わる。つまり、檀田・浅川端遺跡にみる栗林期開始期（栗林Ⅰ式古段階）の集落は、大小３つの世帯共同体からなり、総数 23 戸程度の農業共同体となろう。しかし、栗林Ⅰ式新段階からⅡ式古段階には、居住域をこの共同体内部で移動させながらも、北東集落で１単位集団３住居、南西集落で３単位集団４住居となり住居数は３分の１以下に減少し、時期不詳の住居を加えても、前代の半数にも満たない。その象徴が浅川端遺跡の栗林Ⅰ式新段階以降の住居数が皆無となったことに示される。

一般に農業生産力が上昇し、人口増にともなえば住居数は増加するはずであるが、何故減少しているのか、居住域を地域内とは言え移動させていることの契機も含めて大きな疑問となる。

（2） 二ツ宮・本堀・吉田古屋敷・吉田東町遺跡

二ツ宮遺跡は浅川扇状地の扇端寄りにあり、東流する小沢川である新田川右岸にそった尾根状の台地にある（千野 1992）。東西 180、南北 60 メートルの範囲内の西側と東側に竪穴住居群がある。西側（地区）は弥生時代後期吉田期の住居 9 棟、栗林Ⅱ式新段階の住居 1 棟と土坑群が、東側（地区）は栗林Ⅱ式新段階の住居 2 棟と吉田期の住居 6 棟がある。未調査地を多く残しているので、住居数は倍増する可能性がある。長野盆地における栗林Ⅱ式新段階と吉田期の集落域が一致する少ない例である。吉田式土器の標式遺跡である長野吉田高校グランド遺跡は、同じ浅川扇状地遺跡群にあり、31 棟以上の吉田期のみの集落遺跡で、遺跡の成立契機が問題となる。二ツ宮遺跡の在り方は中期から後期への移行を検討する好材料であるが、土器型式から見た場合に、スムーズな移行は見い出しがたい。栗林期から吉田期への動き（千野 2001）は、長野盆地における漸進的な動きと見るかどうかに係わって来よう。つまり、土器型式上、栗林Ⅱ式新段階と吉田式の間に一型式を置いてスムーズな移行とするかどうかである。したがって、二ツ宮遺跡の集落動態についても、栗林Ⅱ式新段階の集落構造が吉田期のそれと一致しても速断することはひかえ、多方面からの検討が必要となろう。ここでは栗林Ⅱ式新段階の集落遺跡が、不確定な部分は多いが、檀田遺跡と同様な遺跡立地にあり、移住にともない 1 型式の中で消滅したと考えておきたい。その集落構造は少なくとも東西 2 群の集落からなるものであろう。

本掘遺跡（千野 1992）は二ツ宮遺跡の南西 350 メートルにある。新田川上流の右岸上にある。旧地形は明らかとされていないが、二ツ宮遺跡と同様の尾根状微高地にあると考えられる。ここもすべての遺構が調査されてはいないが、50 × 60 メートルの範囲内に栗林Ⅰ式新段階の竪穴住居 2 棟と栗林Ⅰ式新段階からⅡ式古段階の溝 2 本が調査された。比較的規模の小さな栗林Ⅰ式新段階からⅡ式古段階の短期居住型の集落遺跡である。

浅川扇状地上の栗林期の遺跡は一般に小規模な土器型式で 2 型式程度の短期居住型の集落遺跡が多い。遺跡としては弥生時代以降中世に至る複合遺跡の一部となるため、大規模集落遺跡のイメージととられがちであるが、大規模集落は後述する吉田古屋敷・東町遺跡と栗林Ⅱ式期を中心とした神楽橋遺跡ぐらいである。栗林Ⅰ式古段階は前述した檀田・浅川端遺跡と牟礼バイパスD地点遺跡であり、後者は竪穴住居 3 棟プラスアルファ程度の小規模短期居住型であり、駒沢川右岸の尾根状台地にある。

吉田古屋敷と吉田東町遺跡（宿野ほか 2010）は浅川扇状地扇央部で末端部側にあり長野電鉄線信濃吉田駅を中心に、辰巳池遺跡などと一体の遺跡で、400 メートルを超える範囲内に縄文時代以降の遺構が密集している。栗林Ⅰ式古段階の竪穴住居は吉田古屋敷遺跡のうち、信濃吉田駅の周辺部に集中し、栗林Ⅱ式古段階から新段階の竪穴住居は信濃吉田駅北側の栗林Ⅰ式古段階の集落域と複合しながらも、ほぼ全域に認められる。いずれも数棟の竪穴住居がグループを形成しているが、掘立柱建物や墓域は確認されていない。栗林期に限れば、浅川扇状地遺跡群で最も大規模な集落遺跡と云えるが、ここでも時期別の遺構分布から見る限り各時期の集落は自然河川で区切られた微高地上に、数棟からなる単位集団を基本とした世帯共同体が集合した農業共同体を形成し、時間の経過とともに単位集団が微高地内を基本に移動したと予想されるのである。しかし、吉田古屋敷・町東遺跡はすでに述べて来た遺跡と異なる点は、空間的広さの大きさと、継続期間の長さである。栗林Ⅰ式古段階に始まり、今後の検討結果では、吉田期を経て箱清水期にまで集落が継続した可能性もある。環濠を持たない栗林期の大規模集落のひとつとしてとらえておきたい。

以上、浅川扇状地上の栗林期の集落遺跡についてまとめると、以下のとおりとなる（註 2）。

（1）、川に挟まれた微高地上にある。

（2）、土器型式 1 時期数棟の竪穴住居のみで集落域（単位集団）が構成される。牟礼バイパスＤ地点

（3）、単位集団が複数集まって大きな集落域（世帯共同体）を構成する。二ツ屋遺跡

（4）、複数の世帯共同体でより大規模な集落域（農業共同体）を構成する。檀田、吉田古屋敷・町東遺跡

（5）、同一居住域に長期にわたる居住はしない。居住期間は土器型式で 1 ないし 2 型式以内である。これは居住期間が一定であることを示すとともに居住地の移動があることを示している。

（6）、移動先は①集落域内の別の土地に求める場合と②新たな場所に求める場合がある。土器型式 2 型式以内（檀田遺跡）とそれ以上の長期にわたる場合（吉田古屋敷・町東遺跡）とがある。長期にわたる場合には結果として大規模集落の形態を見せる。

（7）、居住域には墓域を伴う。檀田、徳間本堂原遺跡

（8）、環濠や溝で区画された痕跡は見られない。ただし、溝は多種検出されているので断定はできない。

（9）、先行する栗林期以前の遺跡は認められない。ただし、吉田古屋敷遺跡の南 1 km 先に国鉄車両基地遺跡と裾花川扇状地に新諏訪町遺跡がある。

以上を確認した上で浅川扇状地上の遺跡群の動態から考えられることをまとめるとほぼ以下のとおりとなろう。

浅川扇状地が居住地となったのは栗林期となってからであり、他域からの移動によるものである。以後、浅川扇状地上のほぼ全域の微高地に居をかまえ、おそらく旧河川跡の凹地を開拓して水稲耕作による農業生産を開始した。最初の移住の仕方も大規模な 23 戸前後の移住（檀田･浅川端）か 5 棟前後の小規模（牟礼バイパスＤ地点遺跡）のものであったと考えられる。

3　小島・柳原遺跡群　―中俣遺跡―

小島･柳原遺跡群は浅川扇状地遺跡群の末端から 500 メートル幅の後背湿地を挟んだ東側の自然堤防（微高地）上にあり、現千曲川は東 1 キロメートル先にある。遺跡群は東西 1 キロメートル、南北 2.5 キロメートルに及ぶ。長野盆地南部の篠ノ井遺跡群と共通する、千曲川水系の典型的な遺跡立地である。栗林期の遺跡分布は不明部分もあるが、ここでは密度の高い中俣遺跡と接する水内坐一元神社遺跡についてふれる。但し、栗林期に限れば水内坐一元神社遺跡は中俣遺跡の一部をなすので、必要時以外は中俣遺跡として述べる。

栗林期の集落は南北 1 キロメートルに及ぶ。中俣遺跡はその北側にあり、集落の大部分を占める。南から市道建設地点、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区がある。Ⅰ地区は南北 300、東西 100 メートルの範囲に 10 メートル幅のトレンチを南北と東西に 2 本ずつ入れた結果であるので不明部分もある。

集落域は旧河床の凹地を挟んで南北にわかれる。南側Ａは南北 80 メートル、東西 100 メートルの空間に竪穴住居 6 棟（栗林Ⅰ式新 1 、Ⅱ式古 1 、Ⅱ式新 4 ）が散在し、Ｂは 50 メートル四方の範囲に 10 棟（栗林Ⅱ式古 4 、Ⅱ式新 6 ）が集中して見られる。栗林Ⅱ式新段階では切り合い関係から同時存在は 4 棟前後以上となろう。多くの未調査地を残すが、少なくとも、旧河川沿いの微高地上に竪穴住居からなるＡ・Ｂ２群の栗林期の全期間にわたる集落遺跡であり、Ⅱ式新段階で最大となる長期居住型である。

Ｂ住居域北 400 メートル先のⅢ地区では、栗林Ⅰ式新段階と同Ⅱ式新段階の各 1 棟が見られ、同じく

300 メートル先のⅡ地区には栗林期の遺構こそ検出されていないが、相当量の栗林式土器片が出土しているので、Ⅱ地区からⅢ地区にかけて広い住居域が予想される。また、Ⅰ地区の南東 400 メートルにある水内坐一元神社遺跡（宮西遺跡も含む）は南北 400 メートル、東西 200 メートル前後の集落遺跡である。ここでは、栗林期の大型河川跡が調査されている。栗林期の集落が河川沿いの両岸の微高地上に栗林Ⅰ式古段階に始まる長期居住型が少なくとも３か所に存在している。

小島・柳原遺跡群における栗林期の集落域は旧千曲川支流沿いの微高地上に中俣と水内坐一元神社遺跡を合せた 36 ヘクタールに及ぶ広大な領域にあり、松原遺跡に劣らぬ大規模集落遺跡となる。ただし、調査範囲は遺跡のごく一部であり、集落構造を知る上での資料は松原遺跡ほど多くない。しかし、推定居住域内における竪穴の時間的空間的な分布状況を併せ判断すれば、浅川扇状地上の短期居住型の集落構造とは明らかに異なると云ってよい。弥生時代後期以降の多数の遺構が切り合うということもあり、掘立柱建物は未検出であるが集団墓も含めて存在を想定しておくべきである。だとするならば、中俣遺跡を中心とする栗林期の集落は栗林Ⅰ式古段階に始まり、吉田期を経て箱清水期に至る長期継続型の集落遺跡で、その大規模である点を加味すれば、中期においても栗林Ⅱ式期の拠点集落とすることができよう。加えて、ここでも環濠はなさそうである(註3)。したがって中俣遺跡は千曲川下流の栗林、上流の松原遺跡などの「大規模集落の存在を考慮するならば千曲川の河川交通を中心に形成された戦略的ネットワークに組み込まれた、一つの拠点集落」（千野・寺島 1994）や磨製石斧の未製品が出土していることから、松原遺跡と同様「緑色岩類」（保科玄武岩類）製磨製石斧の最終生産地であるとともに佐渡平田産の管玉との交換網のひとつに加える（馬場 2011）などと評価がされるゆえんでもある。

4　飯山盆地の遺跡　―小泉遺跡と上野遺跡―

飯山盆地の西辺に千曲川に沿って６キロメートルにわたって続く低丘陵が長峰丘陵で、西側は広井川ぞいの外様平と呼ぶ低湿地帯を挟んで新潟県境のある関田山脈がある。東側には後背湿地帯と上野遺跡のある自然堤防を経て北流する千曲川がある。

小泉遺跡は長峰丘陵の北寄りにあり、弥生時代の８遺跡で構成される長峰遺跡群の中核的遺跡である。小沢川で区切られた６個の尾根状丘陵上のⅦ地区に栗林期の集落遺跡とそれらに付属した集団墓が調査された（高橋・望月 1995）。特に多量の木棺墓群や竪穴住居と掘立柱建物で小集落が構成されていたことで注目された。この中で、もっとも規模の大きいⅣ地区の集落と墓との関係について検討した（笹澤 2010）ので、本稿に係わる要旨のみ再述する。

小泉遺跡Ⅳ地区は南北 160 メートル、東西 40 メートルほどの丘陵に数棟の竪穴住居と掘立柱建物からなる単位建物群ＡからＧの７群があり、それらに付属した少数の土壙墓を含む木棺墓群ＡからＦの６墓支群がある。ひとつの墓支群は墓の主軸方向と規模・配置などから、夫婦墓（二基一対墓）と、主軸方向を同じくする単独墓や幼児墓も含んだ家族墓（単位集団墓）で、その上で単位建物群と墓支群との比定を試み、Ⅳ地区の集落と集団墓は２ないし３代にわたる６家族集団のものであろうとしたのである。その結果、Ⅳ地区は７家族からなる集落で血縁を中心とした結合体である世帯共同体を形成し、小泉遺跡は数家族から７家族で構成された６ないし７体の世帯共同体からなる農業共同体（都出 1970・1989）で、その存続期間は栗林Ⅰ式内の短期居住であるとした。加えて、墓を含めた集落構成に企画性があることから、集団規制が働き、それは「世帯共同体や複数の世帯共同体からなる農業共同体（都出 1970・1989）を維持するためのもの」とした（笹澤 2010）。

上野遺跡は小泉遺跡の東 1.5 キロメートルにある（望月・常盤井 1994・1996）。南北 800、東西 300 メートルほどの集落遺跡である。居住域は 200 メートル間隔で３ヶ所にあり、うち２ヶ所は墓域を持つ。未調査地を多く残すため全体像の把握は困難であるが、ある程度の傾向は読みとれる。

最南端のＡ集落は栗林Ⅰ式期の数棟の竪穴住居からなる３単位以上の単位建物群からなり、それに接して２基の礫床木棺墓と木棺墓７基からなる。木棺墓と礫床木棺墓の組合わせは長野市伊勢宮、松原、檀田の各遺跡にあるが、松原・檀田遺跡では礫床木棺墓が主体であるのに対してＡ集落では木棺墓主体である。

中央のＢ集落は竪穴住居が３棟検出されているが未調査地が多く実数は不明である。付属する集団墓は木棺墓主体で７基支群・総数 61 基以上である。うち全容が分る５墓支群は２基１対墓を含む単位集団墓６群からなり計画的に構築されている（笹澤 2011）。竪穴住居は栗林Ⅰ式古段階から新段階である所から墓もその年代が与えられる。ＡとＢとの境界は旧地形がはっきりしないが、集団墓が小泉遺跡で見られたとおり、世帯共同体に属するとするならば、それぞれの集団墓の存在からＡ・Ｂ集落はともにそれぞれの世帯共同体のものとすることができよう。Ｃ集落の実体は栗林Ⅰ式古段階の竪穴１棟とやや離れたⅡ式新段階の１棟のみで、実体は不明であるが、上野遺跡は少なくともＡ・Ｂ・Ｃの３世帯共同体からなる農業共同体と云えよう。したがって、上野遺跡は長期居住型の集落で、栗林Ⅰ式古段階に始まり、栗林Ⅱ式新段階まで居住域を移動しながら継続したものと理解される。

小泉遺跡や上野遺跡と同時期の遺跡は近接した柳町遺跡に認められるが、後続する栗林Ⅱ式期の遺跡は意外に知られていない。長峰丘陵の北端にある照岡遺跡は、栗林Ⅱ式古段階から新段階の集落遺跡で、発掘調査された数少ない遺跡である。小泉遺跡とは１キロメートルの距離にある。したがって、小泉遺跡や柳町遺跡の移動先の候補地となろう。しかし、長峰丘陵上にある遺跡群の実体がいまひとつ明らかでない以上、飯山盆地の栗林期集落の動態は今後の課題となる。ただし、上野遺跡が長期居住型の集落遺跡の可能性が強いので、当地方の拠点集落とすることは許されよう。だとするならば、飯山盆地にも、千曲川沿いに長野盆地と同様に上野遺跡と云う拠点集落が栗林Ⅰ式期以降存在したことになろう。

5　長野盆地の集落遺跡の動態と柳沢遺跡

前節では長野盆地北部の栗林期集落遺跡の動態について述べて来たが、これらは大きく２類型に大別できる。ひとつは土器型式で１ないし２型式にわたる短期居住型遺跡（Ａ型）である。小泉遺跡や檀田遺跡などの大型遺跡（Ａ１型）と牟礼バイパスＤ地点遺跡など竪穴住居数棟からなる小型遺跡（Ａ２型）がある。いまひとつは、栗林期全期間にわたる長期居住型遺跡（Ｂ型）で、中俣、吉田古屋敷・町東、栗林、上野と松原遺跡があげられる。後者は、さらに広域にわたる一定地域内で移動により居住域を変え、結果として大規模集落の形態をとる吉田古屋敷・町東遺跡と、一定地域内に多数の居住域を集中させている松原遺跡や中俣遺跡とに大別できる。前者を長期居住移動型（Ｂ１型）、後者を長期居住定住型（Ｂ２型）と呼ぶ。

さて、以上の類型にあてはめれば、浅川扇状地上の栗林期の集落遺跡は、規模の大小に係わらず短期居住型で、唯一吉田古屋敷・町東遺跡がＢ１型である。しかし、各時代ごとの単位建物群（単位集団）の密集度は高くなく拠点集落にはならないと思われる。いっぽう、浅川扇状地遺跡群に近接した中俣遺跡は栗林Ⅱ式期には集落規模を拡大し拠点集落としての条件を整えている。この遺跡も小島境遺跡などＡ型の集落遺跡をかかえているが、同時に、浅川扇状地の遺跡群との係わりもあったものと云えよう。

Ａ型の集落遺跡が成立する背景には集落ごとあるいはその一部の移動が考えられる。それは自然災害や疫病・戦争など突発的な要因もあろうが、一般には生産力の上昇にともなう人口増であり、この解決策の

ひとつが集落の移動に向わしめたとしてよい。この場合に従来開拓した丘陵間の狭い水田を放棄してまでも、より安定した新たな可耕地を求めることになる。ただし、A型の集落遺跡では、時期が下がるにつれても、住居数がさして増加していない。恐らく移動に際して一部の家族集団なり、家族構成員の一部が分家し、本隊の移動先とは全く別の土地へ移動して行ったことも考えられる。栗林Ⅱ式土器の各地への拡散はこうした人々の移動の軌跡であろう。栗林Ⅱ式期において拠点集落と呼ばれる集落遺跡の成立と拡大もまたこうした中で理解されよう。

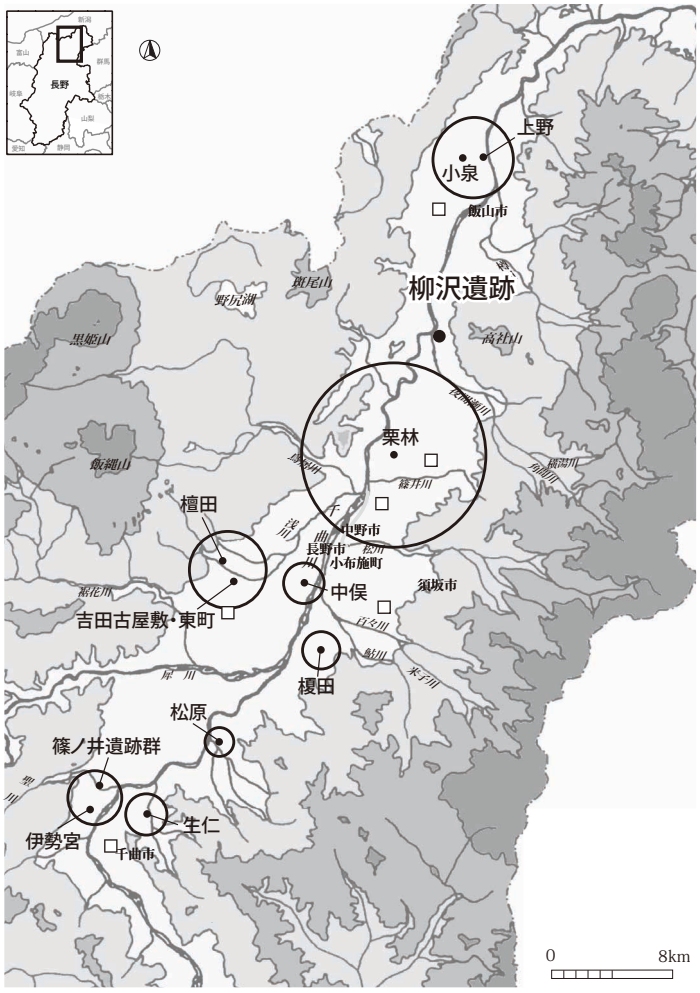
中俣遺跡と浅川扇状地遺跡群の栗林期集落遺跡や飯山盆地の上野と小泉などの遺跡群との集団関係は拠点集落と周辺地域の遺跡との関係であり、栗林遺跡とその周辺にも認めることができる。栗林遺跡は、飯山盆地と中俣遺跡の中間にあり栗林Ⅱ式期に成立した大規模な拠点集落である。周辺には長野市豊野町の鳥居川扇状地遺跡群（笹澤 2001）や中野市安源寺、川久保、南大原、笠倉などA型の集落遺跡があり栗林Ⅱ式期において出現したものである。一方、栗林Ⅰ式の遺跡は浅川扇状地遺跡群で南曽峯遺跡など4遺跡と栗林や荒山遺跡など計6遺跡でいずれもA型である。発掘調査がされていない遺跡もあり、不鮮明な部分もあるが、いずれもⅠ式古段階に出現し新段階で姿を消す。かように栗林Ⅰ式古段階に出現した小規模集団が、この領域内で移住と集住の結果が栗林Ⅱ式期の拠点集落化した栗林遺跡と新たに出現した周辺遺跡との集団関係であろうし、移住と定住は領域を越える場合もあり得た。

拠点集落と周辺遺跡との関係が唯一はっきりしない地域が松原遺跡とその周辺である。石器の生産関係で榎田遺跡との結び付き（町田 2001）が認められるが、この関係は長野盆地の栗林期の集団関係では一般でなく、特殊とすべきであろう。松原遺跡は広大な集落域、大溝で区画された居住域とその居住域を埋める竪穴住居、「平地式建物」、掘立柱建物、土坑などの密集度は長野盆地北部と大きく異なる点である。榎田遺跡とともに石器生産とその搬出の拠点という点でも異なる。松原遺跡と周辺遺跡との関係は今後の周辺部の調査にも委ねられる。

長野盆地は飯山盆地を含めると、南北 60 キロメートルであり、千曲川沿いの微高地上に、南から松原・中俣・栗林・上野の盆地を代表する栗林期の拠点集落が一定間隔で点在する（図２）。それぞれの間隔は 12 キロメートルで栗林と上野遺跡が倍の 24 キロメートルで、このほぼ中間点に柳沢遺跡がある。そして松原と柳沢遺跡を除く、他の拠点集落はA型の周辺集落とともに結びついた大きな地域的結び付きがあったものと思われる。この結び付きは、より広域な農業共同体あるいは栗林連合体（笹澤 2009）の一部とも云えようか。しかし、柳沢遺跡は小河川ごとに区画された丘陵上にある単位集団が栗林Ⅰ式新段階からⅡ式古段階を通して居住された遺跡であり、扇状地や丘陵上の小規模集落の在り方と共通する。しかし礫床木棺墓２基からなる７区墓群がそれに付属するものとするならば 18 基からなる６A区墓群に埋葬された居住域は見当たらないことになる。栗林期の墓域は集落域に接していることが一般であり、集落構成員の多くを埋葬するという前提に立つならば、墓域の西側にあった居住域が千曲川の浸食によって流出したか、居住域が墓域から離れた場所にあったかのいずれかである。６A区墓群は溝によって区画された空間に礫床木棺墓（1 号）を中心に計画的に構築され、墳丘墓的であり、副葬品の多さなど、身分制の崩芽を感じさせるなど、家族墓としては共通するものの、栗林期の集団墓とは大きく異なるもので、だとするならば墓と住の隔離は考えられるかもしれない。その居住域がどこに求めるかは問題となるが、前者としても柳沢遺跡の集落は栗林期最終段階には姿を消した短期居住型で大規模ではないということになる。

長野盆地の栗林Ⅱ式以降の拠点集落と柳沢遺跡が千曲川沿いにあることの意味を考えたい。拠点集落がほぼ一定間隔にあることは、水田可耕地と背後の周辺遺跡との関係で自然発生的に成立したものであろう

が、千曲川の水運とも関係がありそうである（千野・寺島 1994）。千曲川は食料獲得の場、木材や石器の素材などの運搬路、移動の手段そして文化の伝播路でもあり得る。それだけに千曲川を通した共通意識が長野盆地の栗林社会にあってもおかしくはない。しかし、柳沢遺跡の立地は青銅器埋納という次元ではもっと違う意味があったものと思われる。冒頭にも触れたが、千曲川水系の狭窄部への青銅祭器の埋納である。狭窄部は同時に外界との境界でもある。箭塚遺跡の細形銅剣も、柳沢遺跡の青銅祭器と同様に見られようし、大町市海ノ口銅戈、時代は下るが塩尻市芝宮銅鐸は松本盆地と他地域との境界にあり、それぞれの地域にとって、人々の往来や文化・物資の出入口として重要地点である。そこへ埋納する目的は種々であろう（酒井 1980、春成 1977・78）が、柳沢の地が埋納場所に選択されたことの最大の理由は、境界部にあるとともに、青銅器導入の経路にあたっていたことにあろう。



第２図　長野盆地における栗林期集落の地域圏（1：50000）

栗林文化開始期（栗林Ⅰ式古段階）の遺跡は篠ノ井遺跡群などを除けば、檀田・中俣遺跡など飯山盆地を含めた長野盆地の北部に集中し、上越市吹上遺跡など新潟県の海岸部にある（笹澤 2009）。この地域には山間部の高山村湯倉洞窟など山ノ民の遺跡を除けば栗林期以前の遺跡は認められない。弥生時代中頃に長野盆地南部あるいは松本平を含めた人々が長野盆地北部に順次入植し農耕社会を開花させたものと思われる。

しかし、この過程を現在判明している栗林Ⅰ式古段階の集落遺跡に位置付けて考古学的に究明することは至難と云える。土器を始めあらゆる考古学資料の時間と空間的分析が底辺に置かなければならない。今後の課題である。

柳沢青銅祭器の分析をおこなった難波洋三氏は、銅鐸に型式差があるところから、それらは数回にわたり、畿内地方中枢部から日本海まわり吹上遺跡経由で長野盆地に搬入したとした。その最初の時期は栗林Ⅰ式期のうちであり、時間差のある銅鐸であっても同じ大きさの銅鐸をそろえている所から、同じ祭式を行う同一集団であろうとした（難波 2010・2012）。銅戈については、生産地について吉田広氏と難波氏では見解の相違はあるが、銅鐸同様に西日本社会からの搬入であることには異論はない。長野盆地と畿内地方との関係か、北部九州まで含めるかどうかは大きな問題ではあるが、どちらの見解に立つにしても、弥生時代中期中葉以降の長野盆地と西日本社会との情報交換が、極めて密であったことを前提にしないと、青銅祭器を搬入し、使用した集団を特定することはできない。そしてそこに吹上遺跡集団の関与が認めら

れる以上、青銅祭器の最初の搬入時期は栗林期開始期のうちに求めなくてはならない。

長野盆地の栗林期の集落遺跡の動態について概略述べてきたとおり、柳沢青銅祭器を搬入し、埋納した集団は、栗林Ⅰ式期古段階の遺跡が集中する長野盆地北部に限定されよう。

この問題を考える上で、柳沢遺跡のある地に何故祭器を埋納したかを考えなければなるまい。柳沢遺跡の所在地は先述したとおり、高田平野と長野盆地を結ぶ栗林人が好んだ越後産の玉類運搬の「玉の道」（笹澤 2004）にあり、青銅祭器搬入のルートでもある。あるいは馬場氏が指摘された松原産の石斧の運搬路（馬場 2011）にあたる。千曲川の水運もあり得ようし陸路もあり得る。高社山という今日でも信仰の対象となっている山の麓は栗林人にとって、極めて重要視していた土地と思われる。そこはまさに、長野盆地の住民にとって外からの文化搬入の玄関口であったからである。いわば高社山は栗林人にとって、柳沢の土地を象徴するものとして、また青銅器導入に係わり使用していた集団にとって、外界との境界にある柳沢の地が特別な地として意識され続けたとしても何ら不思議ではない。

栗林文化を荷なった人々は集団維持のために、人口増に伴う解決策として、移動（住）政策をとったとすれば、集団関係維持のために様々な規制が働いていた社会でもあり、それは集団墓の造成にも見られる（笹澤 2010）。青銅祭器は集団関係の維持のために必要不可欠であったと思われる。しかし、何らかの理由で、集団関係が崩壊した時、青銅祭器の役割が終わり柳沢青銅器を搬入し保管使用して来た集団が、この地に埋納したことは十分に説明できると考える。よって、柳沢青銅祭器に係わりのある集団は、飯山盆地の集団からはずれる。これらの集団にとって柳沢の土地は交流の出口ではあっても入口ではないからである。彼らもまた、別の祭器を使用していたものと思われる。難波氏の指摘（難波 2010）のとおり、長野盆地へ搬入された青銅器は柳沢青銅器だけに限らないからである。

さて、かように祭器と係わりのある集団の特定を考えて来たが、残るは高社山が遠くに望める地域の集団となる。これに千曲川沿いという制限を加えれば、中俣遺跡を加えた浅川扇状地遺跡群の集団も対象となろう。しかし、ここまで範囲を広げると、埋納された祭器の数量から少々無理があろうし、否んや長野盆地南部は千曲市箭塚遺跡の存在も考え除外されるであろう。ここでは鳥居川扇状地を含めた栗林遺跡北部の栗林期開始期の集団が深く係わっていたと考えておきたい。この地域は先述したとおり、栗林Ⅰ式古段階の遺跡が集中して見られることも根拠となろう。なお、松川扇状地遺跡群（小布施町内）は不明部分が多く今後の課題として今回は除外しておく。

問題は栗林文化を最初に開花させた栗林Ⅰ式古段階の人々に、西日本先進地帯の文化を導入する契機である。長野市檀田遺跡に見るように栗林Ⅰ式古段階ではかなりの規模の農業共同体を形成し、長野盆地北部や上越市吹上遺跡など、日本海岸沿いに彼らの進出が認められる。初期栗林人はすでに述べたように、人口増加による矛盾解決のためにひとつは移住策を、一方では農耕祭器を求めたものと思われる。それは青銅祭器とともに石製祭器（石戈など）であった。

つぎに柳沢青銅祭器に係わる集団が栗林遺跡を中心としたいわば狭義の「栗林連合体」とした場合に柳沢遺跡の集団との関係についてふれる。この問題は集落内における青銅祭器の埋納とも係わるからである。柳沢遺跡の青銅祭器で注目されたひとつに、居住・墓・水田そして埋納坑が、一定間隔にエリア毎に見られることにある。しかし、埋納時期は遺跡全体の層位的検討の結果では、栗林期より後で直接の関係はない。ただし、すでに述べて来たように青銅祭器が柳沢の土地と不可分の関係にあるとするならば、柳沢遺跡の栗林期の集団もまた祭器と深く結びついていたと考えなくてはならない。この場合に柳沢遺跡の栗林期集団のみの祭器とすることもできようが、集落の開始時期が栗林Ⅰ式期後半で青銅器入手時期よりやや

新しく、かつ小規模集団であることを考えれば、単独小集団としての保有では該当しないことになる。よって、柳沢遺跡の栗林期の集団は、栗林遺跡を含めた広域集団の一員であるとともに青銅祭器の保有集団のひとつで、この集団の故地にあって、千曲川水運にも係わっていたかも知れない。柳沢遺跡の礫床墓群には長野盆地の墓制とは一味違うリーダーの存在（都出 2011）を暗示していると云えよう。

柳沢遺跡に栗林期最終末の居住が認められない以上、中期末では柳沢遺跡は千曲川沿いの居住地としての意味はなくなり、埋納時には、集団にとっての重要な故地としての意識からこの地が埋納の対象となったものと思われ、集落から離れた場所に埋納する（佐原 1996）原則とは何ら異なるものではないと云えよう。

註

1　一般に長野盆地の弥生遺跡の多くが大型開発に伴い明らかにされてきた。よってこれらから除外された旧市街地や、早期の大型団地造成地など未調査地が相当数あるし、沖積地深くねむるものもあろう。こうした未周知の遺跡が多数あることも視野に入れながら本論を進める。また、松原遺跡は栗林期末期となると遺跡数が減変するという（青木・贄田 2000）。この動きが長野盆地全域に及ぶのか、後期吉田期への動向も含めて検討されねばならない。しかし、基本となるこの過程は土器の編年も含めて、筆者自身、十分な見通しがたたない。今後の課題としておきたい。なお、筆者の栗林Ⅰ式新段階の土器は、最近の諸氏の編年案の栗林２式古段階の多くを含んでいる。Ⅰ式とⅡ式では遺跡の動態上でも大きな画期と考えるからである。また、遺跡群の呼称は長野市域については長野市教育委員会の遺跡分布図に従った。ただし、「長野遺跡群」は裾花川扇状地遺跡群に含め、必要に応じて単独使用した。

2　浅川扇状地の栗林期の遺跡分布（小池 2008）を見ると、扇頂部側（檀田・浅川端・本村東沖・神楽橋などの遺跡）と扇端側（吉田古屋敷・吉田町東・本堀・二ツ宮・古屋敷・徳間本堂原・牟礼バイパスＤ地点などの遺跡）に集中し、これらの中央部分と裾花川扇状地側の扇状地南側にはほとんど認められない。これはこの地域が住宅団地としての開発が早く、未調査による所が大きい。

3　水内座一元神社遺跡には大規模な箱清水期の環濠がある。

参考・引用文献（報告書類一部紙面の都合上割愛）

青木一男・贄田明　2000　「第３節　栗林式土器の観察法」『松原遺跡 弥生・総論３弥生中期・土器本文』長野県埋蔵文化財センター
安藤広道　2011　「長野県の弥生時代集落研究雑感」『長野県考古学会誌』138・139 合併号　長野県考古学会
石川日出志　2002　「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100 号
2009　「中野市・柳沢遺跡・青銅器埋納坑調査の意義」『信濃』Ⅲ・61-4　信濃史学会
2009　「弥生文化と信濃」『山を越えて川に沿う―信濃弥生文化の確立』長野県立歴史館
2011　「弥生時代中期『栗林文化』をめぐる諸課題と展望」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
上田典男　2007　「中野市柳沢遺跡発見の銅戈・銅鐸について」『長野県考古学会誌』122
神田五六　1935　「信濃栗林の弥生式石器」『考古学』6-10　東京考古学会
1936　「北信濃栗林の弥生式土器」『考古学』7-7
桐原　健　1963　「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3　日本考古學會
1966　「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』Ⅲ・18-4
1973　「信濃における弥生時代の玉のあり方について」『信濃』Ⅲ・25-4
小池勝典　2008　「結語」『吉田古屋敷遺跡（5）』　長野市教育委員会
小山岳夫　2011　「栗林期の青銅器」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
工楽善通　2008　「弥生時代の青銅器」『北信濃柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』　長野県埋蔵文化財センター
酒井龍一　1980　「銅鐸（邪気と封じ込めのオブジェ）論」『摂河泉文化資料』21　北村文庫会
笹澤　浩　1977　「入門講座　弥生土器中部高地１～３」『考古学ジャーナル』131・133・134　ニュー・サイエンス社
1996　「中部山岳地方の弥生土器」「新諏訪町式土器」「栗林式土器」『日本土器事典』雄山閣出版
2001　「弥生時代」『豊野町誌　豊野の資料（一）』豊野町誌刊行会
2004　「弥生文化と農耕社会」『上越市史通史編１　自然・原始・古代』　上越市

2008 「信濃の弥生文化と柳沢遺跡」『北信濃柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』長野県埋蔵文化財センター
2009 「中野市柳沢遺跡出土青銅器の意義と今後の展望」『長野県考古学会誌』127 号
2010 「中部高地の弥生時代中期の墓制（1）―長野県飯山市小泉遺跡の基礎的検討から―」『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
2011a 「遺跡が語る信濃・安曇・安曇族」『安曇ゆかりの地との交流会』 安曇誕生の系譜を探る会
2011b 「信州における弥生中期文化研究の到達点と課題（抄）」『長野県学会誌』138・139 合併号
笹澤正史ほか 2006 『新潟県上越市吹上遺跡―主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書 1』
笹澤正史 2009 「新潟県出土の栗林式土器」『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会
佐原 真 1996 『歴史発掘 8 祭りのカネ銅鐸』講談社
設楽博己 2011a「総論 弥生中期という時代」『多様化する弥生文化 弥生時代の考古学 3』 同成社
2011b「信濃の弥生墓制」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
清水竜太・山下大輔 2005 『浅川扇状地遺跡群壇田遺跡（2）』 長野市教育委員会
宿野隆史ほか 2010 『浅川扇状地遺跡群・吉田町東遺跡（3）・駒沢新町遺跡（3）』 長野市教育委員会
千野 浩 1992 『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』 長野市教育委員会
2001 「2 出土土器の様相―吉田式土器の基礎的検討―」『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』 長野市教育委員会
千野 浩・寺島孝典 1994 『宮西遺跡』 長野市教育委員会
都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」『講座日本史 1 古代国家』東京大学出版会
1989 「土器の地域色と通婚圏」「弥生時代集落の構成」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
2011 『古代国家はいつ成立したか』岩波新書
坪井清足 1953 「高丘村弥生式遺跡調査」『下高井』長野県教育委員会
寺島孝典 2001 「成立期の栗林式土器」『長野県考古学会誌』93・94 号
長野県埋蔵文化財センター 2008 『写真速報グラフ 北信濃柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』 信濃毎日新聞社
難波洋三 2010 「柳沢遺跡の銅鐸と銅戈」『山を越え川に沿う―信州弥生文化の確立―』 長野県立歴史館
2012 「銅鐸祭祀の終焉―埋納と放棄と―」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』安土城考古博物館
春成秀爾 1977 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 1 集 国立歴史民俗博物館
1978 「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』4-3 雄山閣出版
馬場伸一郎 2007 「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』第 54 巻第 1 号
2008a 「長野盆地松原遺跡」『弥生時代の考古学 第 8 巻、集落から読む弥生社会』 同成社
2008b 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究―弥生交易論の可能性を視野に入れて―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集
2011 「栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
広田和穂 2011 「中野市柳沢遺跡の調査概要」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
福永伸哉 1987 「木棺墓」『弥生文化の研究 8 祭と墓の装い』雄山閣出版
藤森栄一 1936 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』7-7
町田勝則 2001 「弥生石斧の生産と流通に関するモデル試論―太型蛤刃と扁平片刃の経済的循環のちがい」『第三回中部弥生時代研究会発表要旨集―生産と流通』 中部弥生時代研究会
松沢芳宏 2008 「柳沢銅戈の提唱と青銅器文化の流入経路の予察」『信濃』Ⅲ・60-7
望月静雄・高橋桂 1995 『小泉弥生時代遺跡』 飯山市教育委員会
望月静雄・常盤井智行 1994 『上野遺跡Ⅴ』 飯山市教育委員会
1996 『上野遺跡Ⅷ』 飯山市教育委員会
吉田 広 2001 『弥生時代の武器型青銅器』 平成 12 年度文部科学省科学技術研究費補助金特定研究Ａ（1）国立歴史民俗博物館春成研究室
綿田弘実 2008 「中野市柳沢遺跡の銅戈・銅鐸埋納坑」『長野県考古学会誌』125 号